

# 大学生の学校嫌悪感と怠学傾向および居場所に関する検討

——意欲低下領域尺度および学校ぎらい感情測定尺度の因子構造について——

池田龍也・水口啓吾・高野恵代

The relationship between aversion to school, tendency to neglect one's schoolwork and ibasho in undergraduate students: The factorial structures of passive area scale and unwillingness to attend school scale.

Tatsuya Ikeda, Keigo Minakuchi, and Yasuyo Takano

In this study, we investigate factorial structure of the passive area scale and the unwillingness to attend school scale. A total participant is 298 undergraduate student (male is 106, female is 191 and unknown is 1). Our exploratory factor analysis data and confirmatory factor analysis data indicate that the passive area scale has a four-factorial structure in first analysis. Each factors are named “passive school-life”, “passive one’s schoolwork”, “passive learning”, and “inattention”. The factors which are “passive learning” and “inattention” show low  $\alpha$  coefficients. Therefore, it is need to be paid attention, when these factors are used. In second analysis, our exploratory factor analysis data and confirmatory factor analysis data indicate that the unwillingness to attend school scale has a four-factorial structure. Each factors are named “aversion to school” and “desire to move out”. A total of scale and both factors show adequate  $\alpha$  coefficients.

キーワード : passive area scale, unwillingness to attend school scale, factor analysis, factorial structure

## 問題および目的

医療技術の進歩によって平均寿命が増加し、一方で出生率が低下したことにより、本邦は深刻な少子高齢化社会となっている。総務省統計局の報告によれば、我が国における人口の内 25%が高齢者 (65 歳以上) であり、4 人に 1 人が高齢である (総務省統計局, 2014)。改めて述べるまでもないが本邦には国民年金制度が存在し、労働者が高齢者の生活を支える、という社会福祉システムが成立している。総務省統計局によれば生産年齢人口 (15 歳~64 歳) の割合は 62.1 %であるが (総務省統計局, 2014), 15 歳以上 64 歳以下の者全員が就労しているわけではないため、実際の生産人口はより少数となることが推測される。

高齢者の増加は医療技術の進歩、および第二次ベビーブーム世代の人々が高齢化することで、これからも加速していくことが予想される。そのような制度の是非に関する議論は別の機会に譲ると

しても、このような社会を支えるのが現代日本の青年に課された社会的宿命であり、揺るぎない現状である。このような状況の中、本邦の将来を担う若者を支援・援助することは、社会制度を支える上でも喫緊の課題と言えよう。

青年期における若者の進路選択は3つに大別される。まず、就学就労せず、就労のための活動をしていないことである。これはNEETや社会的ひきこもりとして社会問題化しており、後に触れる。次に、正規・非正規を問わず就労することが挙げられる。3つ目は、高校・大学・短期大学・専門学校等への進学がある。本邦は2010年前後に大学全入時代を迎えた。これは大学教育において極めて重要な時代である。それは、より幅広い学生に対する支援が求められるためである。

大学生の中途退学や休学の内、経済的理由が最大の要因である(文部科学省, 2014)。しかし、中途退学の主たる理由の1つとして学業不振が挙げられおり、高等学校と大学のギャップに適応できない者が一定数存在する可能性が指摘されている(文部科学省, 2014)。大学は高等学校では、次の2点が大きく異なる。第1に、授業の履修制度の相違がある。高等学校までは選択科目はあるものの、基本的に学校へ行けば定められたスケジュール(時間割)に従い授業を受けるという、消極的姿勢が許容される。しかし大学では卒業要件の関係で必須履修科目が存在するものの、どの科目を履修するのかは個人の自由意志に委ねられている部分が多い。そのため高等学校までとは異なり、自分自身で時間割を作っていくという積極的姿勢が求められる。第2に、対人関係の拡大・流動化が挙げられる。高等学校までは基本的に学級(クラス)に所属し、これを支点として部活動等の課外活動に所属する。大学においても講座やゼミなど比較的小規模な集団に所属するものの、基本的に毎朝出欠が取られることはない。そのため大学において親密な対人関係を構築するためには、学生自身が何らかの行動を起こし、他者と関わる機会を模索していかねばならない。従って高校生と大学生は求められる行動様式が異なり、大学生の方がより積極的かつ責任を持った行動が求められる。

先述の通り、近年、青年の無気力さや引きこもりなど、主に若年層における退却的傾向が社会問題となっており、青年の意欲向上や自立支援を目的にした体験活動も行われている(文部科学省, 2008)。大学生においても、特に理由もなく授業を休んだり、不登校になって大学に現れなくなった学生も存在する。福田(2000)が実施した不登校実態調査によると、1.2~2%の大学生が不登校状態にあると推定されている。

大学生特有の無気力状態については、これまで多くの研究がなされてきた。Walters(1961)笠原・岡本訳(1975)が大学生特有の無気力状態を“スチューデント・アパシー”と命名し、我が国では、笠原(1976)がアパシーの概念を導入した。そして、鉄島(1993)はアパシー傾向を“精神病の無気力と異なり、心理的要因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと”と定義した。しかし、鉄島(1993)の研究について下山(1995)は、一般学生のアパシー傾向を実証的に研究したという点で意義を認めつつも、一般学生の無気力を人格的障害アパシーとの連続線上で論じることは、日本独自の青年期における積極的な発達の意味を阻害するものであると指摘している。下山のいう積極的な発達の意味とは、青年期特有の心理社会的モラトリアム状態を指す。実際に、学業では無気力であっても、アルバイトやサークル活動など学業以外には積極的に取り組む学生も存在する(笠原, 1976)。そこで、下山(1995)は、“領域的側面”、“心理障害的側面”、“発達の側面”

の3領域に分けた領域ごとの意欲低下と、青年期後期の発達状況およびスチューデント・アパシーの関連性について男子大学生を対象に検討した。結果、授業に関する意欲低下は、生活態度によって生じた行動上の問題であり、学業に対する意欲低下は、職業決定といった課題を一時延期している状態であることが示唆された。しかし、大学そのものに対する意欲低下は、授業及び学業に関する意欲低下と比較して発達的問題やスチューデント・アパシーの心理的障害との関連性を指摘した。このことから、学生の大学生活における意欲低下には、ときに危険な問題をはらんでいると考えられる。

若者の意欲低下や無気力状態を引き起こす要因の1つとして、“学校への嫌悪感”が考えられる。荻間澤・河村(2001)は、高校生を対象として、登校忌避的感情と学校生活適応との関連について検討を行った。その結果、学習・部活動・学級・教師・校則への適応が学校に対する忌避的感情に影響を及ぼすことを示した。

牧野・森(2002)は、大学生を対象として、大学生生活の満足度を調査した。その結果、約4割の学生が大学生生活に満足していなかった。この結果は、大学へ通学するものの、大学生生活に嫌悪感や忌避的感情を抱いている学生が多い可能性を示唆している。

このように、学生生活における意欲低下に関しては、学校そのものに対して、満足感や充実感を感じていないことや、学校に対する嫌悪感情が影響を及ぼしていることが考えられる。このことは、既述したような、本邦の大学生が、学業に関しては無気力的状態を引き起こすにもかかわらず、学業以外に関しては積極的に取り組む(笠原, 1976)といった、大学への怠学的感情のみを抱いてしまう原因を説明する1つになるだろう。

また、近年、学校への嫌悪感が、若者の無気力やアパシー症候群と関連していることが指摘されている(稲村, 1994)。しかしながら、大学生を対象とした大学への嫌悪感と無気力に関する検討は十分に行われてはいない。既述したように、大学生の大学生活そのものに対する意欲低下は、スチューデント・アパシーを引き起こす危険性がある(下山, 1995)。そのため、自身が通学する大学に関してどのような感情を抱き、どれ程の満足感を抱いているのかといった感情の度合いが、学生の意欲低下とどのように関連しているのかを検討していくことは、重要な課題であると言える。

以上より、本研究は大学生における学校嫌悪感情および怠学傾向、そして居場所の関連を検討することを目的とする。本稿はその前段階として、意欲低下領域尺度(下山, 1995)および学校ざらい感情測定尺度(古市, 1991)の因子構造を明らかにする。意欲低下領域尺度ならびに学校ざらい感情測定尺度は、生徒・学生に対してしばしば用いられる代表的な尺度の1つである。しかし、いずれの尺度も開発から20年以上経過している。森田・岡本(2014)は、約30年前に開発された自我機能調査票(中西・古市, 1981)が、開発当時と現代において異なる因子構造を示したことを報告している。このことから、因子構造は固定的なものでなく、時間の経過や時代の変容によって変化する、流動的なものであると考えられる。そこで本稿では、学校に関する研究でより頻繁に使用される意欲低下領域尺度(下山, 1995)および学校ざらい感情測定尺度(古市, 1991)の因子構造を検討することを目的とする。

## 方法

**研究協力者** 国立 A 大学の大学生 298 名 (男性 106 名, 女性 191 名, 性別不明 1 名) を対象とした。対象者の学年は, 学部 1 年生 93 名, 2 年生 57 名, 3 年生 133 名, 4 年生 10 名, 博士課程後期 1 年生 1 名, 研究生 1 名, 学年不明者 3 名であった。

**有効回答者 (分析 1)** 研究協力者の内, 意欲低下領域尺度に欠損のない者 292 名 (男性 106 名, 女性 185 名, 性別不明 1 名) を分析 1 の対象者とした。有効回答者の学年は, 1 年生 93 名, 2 年生 56 名, 3 年生 128 名, 4 年生 10 名, 博士課程後期 1 年生 1 名, 研究生 1 名, 学年不明者 3 名であった。有効回答率は 97.65% であった。

**有効回答者 (分析 2)** 研究協力者の内, 学校ざらい感情測定尺度に欠損のない者 298 名 (男性 106 名, 女性 191 名, 性別不明 1 名) を分析 2 の対象者とした。有効回答率は 100% であった。

**尺度構成** (1) 意欲低下領域尺度 (下山, 1995): 全 15 項目から構成される。5 件法 (1.あてはまらない~5.あてはまる) にて実施した。(2) 学校嫌い感情測定尺度 (古市, 1991): 全 12 項目から構成される。5 件法 (1.あてはまらない~5.あてはまる) にて実施した。(3) フェイス項目: 学年・所属・性別について尋ねた。

**調査手順** 無記名自記式の質問紙調査を集合法によって実施した。調査実施にあたり, 本調査の主旨, 調査に協力しないことで不利益が生じることはないこと, 得られたデータは統計的に処理されるため公表された結果から個人が特定されることはないことを口頭および紙面にしよって教示し, 以上の内容について同意できる者のみ回答し, 回答を以って調査協力への同意とした。

**分析手順** 各尺度の固有値, *MAP*, *RMSEA*, *BIC* および平行分析を参考に, 因子数を決定した。決定された因子数に基づいた因子分析を実施し, 同時に尺度全体と各因子の信頼性係数を算出した。なお因子分析の実施にあたり, 逆転項目は原版の通りに逆転したものを使用した。

**使用機材** 統計解析には R ver.3.2.2 (R Core Team, 2014) を使用した。記述統計量の算出, 探索的因子分析および平行分析のためにパッケージ “psych” (Revelle, 2015) を, 確認的因子分析のためにパッケージ “lavaan” (Yves Rosseel, 2012) を用いた。

## 結果

### 分析 1 意欲低下領域尺度の因子構造の検討

**確認的因子分析** 意欲低下領域尺度 (下山, 1995) における因子構造を, 確認的因子分析によって検討した。適合度の各指標は  $\chi^2(87.00) = 259.37 (p < .001)$ , *GFI* = .89, *CFI* = .80, *RMSEA* = .08, *AIC* = 12940.08, *BIC* = 13061.41 であった。いずれの適合度も良好とは断言できないため, 探索的因子分析を実施することとした。

**因子構造の探索** 探索的因子分析に先立ち, 因子数を検討するために固有値・*MAP*・*RMSEA*・*BIC* を算出した (Table 1)。同時に, 最尤法による平行分析も実施した。固有値の減衰率と *MAP* は 2 因子解を, *BIC* と平行分析 (主成分) は 3 因子解を, 平行分析 (因子) は 4 因子解を, *RMSEA* は 6 以上の因子構造を提案した。以上の点から, 因子構造は 2 因子から 4 因子であることが示された。3 因子解の場合, Table 2 のように複数の因子へ多重負荷する項目や, 因子負荷量が低いものがみら

れた。一方、4因子解の場合はTable 3のように多重負荷も低因子負荷量もみられなかった。これらの点に加え、解釈可能性を考慮し、4因子解が採択された。4因子解における因子構造の適合度を、確認的因子分析によって算出した。適合度の各指標は $\chi^2(84.00) = 230.26 (p < .001)$ ,  $GFI = .91$ ,  $CFI = .83$ ,  $RMSEA = .08$ ,  $AIC = 12916.97$ ,  $BIC = 13049.33$ であり、先述の3因子解の場合よりもわずかに適合度が改善した。以上より、意欲低下領域尺度の因子構造は4因子構造であることが示された。

第1因子は「item14: 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である」や「item12: 大学で

Table 1  
意欲低下領域尺度における因子数の指標

因子数	固有値	MAP	RMSEA	BIC	平行分析 (FA) <sup>a</sup>	平行分析 (PC) <sup>b</sup>
1	3.24	.031	.133	33	1.802	1.840
2	<b>1.97</b>	<b>.027</b>	.105	-121	0.846	0.658
3	1.75	.029	.083	<b>-174</b>	0.546	<b>0.511</b>
4	1.15	.034	.070	-169	<b>0.162</b>	-0.034
5	1.04	.043	.052	-157	-0.023	-0.090
6	0.86	.056	<b>.035</b>	-131	-0.050	-0.226
7	0.81	.074	<b>.003</b>	-99	-0.142	-0.230

注) 平行分析の値は、実測データと乱数データの差を示す。

<sup>a</sup> 因子分析における平行分析。<sup>b</sup> 主成分分析における平行分析。

Table 2  
意欲低下領域尺度の3因子解 (最尤法・プロマックス回転)

No.	項目	因子			共通性	独自性
		F1	F2	F3		
7	朝寝坊などで授業に遅れることが多い	<b>.79</b>	-.12	-.12	.56	.44
8	何となく授業をさぼることがある	<b>.79</b>	.02	-.03	.62	.38
6	授業に出る気がしない	<b>.59</b>	.15	.05	.44	.56
10	授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある	<b>.49</b>	-.09	.03	.23	.77
9	大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い	<b>.42</b>	-.01	.08	.20	.81
14	大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である (※)	-.05	<b>.80</b>	.14	.65	.35
12	大学ではいろいろな人と交流がある (※)	-.03	<b>.59</b>	.11	.36	.64
13	大学にいるより、自分ひとりである方が良い	.01	<b>.50</b>	-.10	.25	.75
15	大学の中で自分の居場所がないと感じる	.08	<b>.45</b>	-.02	.22	.78
11	学生生活で打ち込むものがない	.16	.33	.00	.16	.84
5	大学で勉強することで自分の関心を深めている (※)	-.09	<b>.35</b>	<b>.62</b>	.51	.49
1	教師に言われなくても自分から進んで勉強する (※)	-.04	-.02	<b>.60</b>	.35	.66
3	勉強で疑問に思ったことはすぐに調べる (※)	-.08	.03	<b>.49</b>	.22	.78
4	必要な単位以外でも、関心のある授業は取るようにしている (※)	.03	-.06	<b>.45</b>	.21	.79
2	勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう	.15	-.13	.28	.12	.88
因子間相関		F1	1.00	.27	.28	
		F2	.27	1.00	.10	
		F3	.28	.10	1.00	

注) (※) は原版での逆転項目を示す。

Table 3  
意欲低下領域尺度の4因子解(最尤法・プロマックス回転)

No.	項目	因子				共通性	独自性
		F1	F2	F3	F4		
14	大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である(※)	<b>.78</b>	.06	.21	-.16	.64	.36
12	大学ではいろいろな人と交流がある(※)	<b>.59</b>	.03	.13	-.01	.36	.64
13	大学にいるより、自分ひとりの方が良い	<b>.52</b>	-.04	-.09	.05	.28	.73
15	大学の中で自分の居場所がないと感じる	<b>.49</b>	-.15	-.09	.33	.36	.64
11	学生生活で打ち込むものがない	<b>.35</b>	.08	.00	.08	.17	.83
8	何となく授業をさぼることがある	.02	<b>.86</b>	.03	.01	.75	.25
7	朝寝坊などで授業に遅れることが多い	-.10	<b>.59</b>	-.10	.25	.51	.49
6	授業に出る気がしない	.16	<b>.58</b>	.10	.04	.45	.55
5	大学で勉強することで自分の関心を深めている(※)	.32	.05	<b>.69</b>	-.13	.56	.44
1	教師に言われなくても自分から進んで勉強する(※)	-.04	.06	<b>.54</b>	.14	.33	.67
4	必要な単位以外でも、関心のある授業は取るようにしている(※)	-.07	.09	<b>.45</b>	-.03	.21	.79
3	勉強で疑問に思ったことはすぐに調べる(※)	.02	-.09	<b>.44</b>	.09	.21	.79
9	大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い	.00	.03	-.02	<b>.61</b>	.38	.62
10	授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある	-.09	.10	-.06	<b>.60</b>	.39	.62
2	勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	-.14	-.08	.21	<b>.38</b>	.19	.81
因子間相関		F1	1.00	.22	.05	.25	
		F2	.22	1.00	.12	.48	
		F3	.05	.12	1.00	.25	

注)(※)は原版での逆転項目を示す。

はいろいろな人と交流がある」といった項目に高い因子負荷量が見られた。これらの項目は逆転項目であることを考慮し、第1因子を「学生生活意欲低下」因子と命名した。次に第2因子は「item8：何となく授業をさぼることがある」や「item7：朝寝坊などで授業に遅れることが多い」といった項目に高い因子負荷量がみられた。これらの特徴から、第2因子を「授業意欲低下」因子と命名した。第3因子は「item5：大学で勉強することで自分の関心を深めている」や「item1：教師に言われなくても自分から進んで勉強する」という項目に高い因子負荷量がみとめられた。これらの項目は逆転項目であることを踏まえ、第3因子を「学習意欲低下」因子と命名した。最後に第4因子は「item9：大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い」と「item10：授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある」といった、意欲低下というよりもむしろ注意の欠如あるいは低下を示す項目に高い因子負荷量がみられた。従って第4因子を「注意散漫」因子と命名した。

**記述統計量と信頼性係数** 尺度の概要を示すために、記述統計量と信頼性係数を算出した (Table 4)。尺度全体の信頼性は  $\alpha = .73$  であった。下位因子の信頼性はそれぞれ「学生生活意欲低下」 $\alpha = .70$ 、「授業意欲低下」 $\alpha = .77$ 、「授業意欲低下」 $\alpha = .61$ 、「注意散漫」 $\alpha = .52$  であった。

## 分析2 学校嫌い感情測定尺度の因子構造の検討

**因子数の検討** 学校ぎらい感情測定尺度の因子構造を明らかにするため、固有値・MAP・RMSEA・BICを算出した。同時に、最尤法による平行分析も実施した。MAPと平行分析(主成分)は1因子

構造を、*BIC* と平行分析 (因子) は 2 因子構造を、*RMSEA* は 4 因子以上の因子構造を提案した (Table 5)。

**探索的因子分析** 先述の通り、*MAP* と平行分析 (主成分) は 1 因子構造を、*BIC* と平行分析 (因子) は 2 因子構造を提案した。従って学校嫌い感情測定尺度の因子構造は 1 因子から 2 因子の間にあると推測される。全 12 項目の尺度が 1 因子構造であるとは考え難いため、本稿では 2 因子構造を仮定し、因子分析を実施した。因子抽出法は最尤法、回転法はプロマックス回転を用いた。因子分析結果を Table 6 に示す。Table 6 で示された因子構造の適合度を検討するために、確認的因子分析が実施された。その結果、適合度の各指標は  $\chi^2(53.00) = 127.83$  ( $p < .001$ ),  $GFI = .93$ ,  $CFI = .95$ ,  $RMSEA = .07$ ,  $AIC = 8793.48$ ,  $BIC = 8885.91$  であった。比較検討のために 1 因子解を想定した確認的因子分析を実施したところ、適合度の各指標は  $\chi^2(54.00) = 194.54$  ( $p < .001$ ),  $GFI = .90$ ,  $CFI = .90$ ,  $RMSEA = .09$ ,  $AIC = 8858.19$ ,  $BIC = 8946.92$  であり、2 因子構造の方が良好な適合度を示した。以上より、学校ざらい感情測定尺度は 2 因子構造であることが示された。

まず第 1 因子は「項目 3：大学さえなければ、毎日楽しいだろうなと思う」や「項目 6：日曜 (休み) の夜、また明日から大学かと思うと気が重くなる」などのように、大学の存在自体を嫌悪する項目に高い因子負荷量が見られた。これらの特徴から、第 1 因子を「大学嫌悪」因子とした。次に第 2 因子は「項目 10：今の大学が嫌で、転学したいと思うことがある」と「項目 9：今の学科 (学

Table 4  
意欲低下領域尺度および下位因子の記述統計量と信頼性 ( $n = 292$ )

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	歪度	尖度	$\alpha$
意欲低下	37.59	7.87	0.46	18	58	0.09	-0.48	.73
学生生活意欲低下	11.49	3.68	0.22	5	23	0.37	-0.40	.70
授業意欲低下	6.78	3.15	0.18	3	15	0.66	-0.52	.77
学習意欲低下	11.27	3.05	0.18	4	20	0.17	-0.19	.61
注意散漫	8.05	2.48	0.14	3	14	0.21	-0.53	.52

Table 5  
学校ざらい感情測定尺度における因子数の指標

因子数	固有値	<i>MAP</i>	<i>RMSEA</i>	<i>BIC</i>	平行分析(FA) <sup>a</sup>	平行分析(PC) <sup>b</sup>
1	5.368	<b>.020</b>	.093	-117	4.273	<b>4.145</b>
2	<b>1.193</b>	.028	.069	<b>-144</b>	<b>0.220</b>	-0.045
3	0.843	.042	.065	-115	-0.033	-0.420
4	0.742	.055	<b>.046</b>	-99	<b>0.020</b>	-0.397
5	0.647	.077	<b>.031</b>	-71	-0.026	-0.416
6	0.604	.110	<b>.000</b>	-45	-0.016	-0.416
7	0.576	.157	<b>.048</b>	-12	-0.001	-0.414

注) 平行分析の値は、実測データと乱数データの差を示す。

<sup>a</sup> 因子分析における平行分析。<sup>b</sup> 主成分分析における平行分析。



部)は良くないので、他の学科(学部)に変わりたい」の2項目から構成される。これらの項目では転学や転学科(転学部)を希望する点が特徴的である。従って第2因子を「転出希求」因子とした。

**記述統計量と信頼性** 尺度の概要を示すために、記述統計量と信頼性係数を算出した(Table 7)。信頼性は尺度全体で $\alpha=.88$ であった。下位因子の信頼性は「大学嫌悪」 $\alpha=.87$ 、「転出希求」 $\alpha=.79$ であった。転出希求因子は.79とやや低い信頼性を示したものの、項目数が少ないと $\alpha$ 係数が低下するという性質を踏まえると、2項目で.79は十分な信頼性が示されたと評価できるだろう。

### 考 察

本研究の目的は、大学生における学校嫌悪感情および怠学傾向、そして居場所の関連を検討することであり、本稿ではその前段階として、意欲低下領域尺度(下山,1995)および学校ざらい感情測定尺度(古市,1991)の因子構造を明らかにすることであった。

まず、意欲低下領域尺度(下山,1995)について述べる。下山(1995)は大学生の無気力を考察する上で、どのような領域で無気力であるのか、どのような領域では無気力でないのか、という点を捉えるために意欲低下領域尺度を作成した。意欲低下領域尺度の因子分析の結果、下山(1995)は大学生の無気力を3領域、すなわち「学業領域」・「授業領域」・「大学領域」に大別し、論考している。しかし先述のように、因子分析によって導かれる因子構造は、経年変化する可能性が指摘されている(森田・岡本,2014)。特に大学生の性質や大学のあり方は、年々変化している。従って、下山(1995)において示された因子構造も、飽くまで1995年時点のものと考えてのが妥当である。更に、下山(1995)では男子大学生を対象としたデータに基づいた因子分析を実施しているため、女子学生を含めた場合の因子構造は不明である。そこで本稿では、まず下山(1995)の示した3因子構造を確認的因子分析によって適合度を算出し、次いで探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を

Table 6  
学校ざらい感情測定尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)

No.	項 目	因 子		
		F1	F2	共通性 独自性
3	大学さえなければ、毎日楽しいだろうと思う	<b>.71</b>	.10	.61 .39
6	日曜(休み)の夜、また明日から大学かと思うと気が重くなる	<b>.68</b>	-.22	.32 .68
2	朝、なんとなく大学に行きたくないと思うことがある	<b>.64</b>	-.25	.27 .73
1	大学に来て何も楽しいことがない	<b>.62</b>	.14	.51 .49
7	大学をやめたくなる時がある	<b>.61</b>	.14	.50 .50
11	できれば、大学なんかなくなれば良いのと思う	<b>.58</b>	.18	.50 .50
8	大学にいるのが嫌で、授業が終わったらすぐ家に帰りたい	<b>.58</b>	.07	.39 .61
12	大学にいるとき、よくゆううつになってくる	<b>.52</b>	.22	.46 .54
5	大学では嫌なことばかりである	<b>.50</b>	.17	.39 .61
4	私はこの大学が好きだ(※)	<b>.39</b>	.15	.25 .75
10	今の大学が嫌で、転学したいと思うことがある	.04	<b>.82</b>	.72 .28
9	今の学科(学部)は良くないので、他の学科(学部)に変わりたい	.02	<b>.75</b>	.58 .42
因子間相関		F1	1.00	.64

注) (※)は原版での逆転項目を示す。



Table 7  
 学校ざらい感情測定尺度および下位因子における記述統計と信頼性 ( $n = 298$ )

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	歪度	尖度	$\alpha$
学校嫌い	24.32	7.86	0.46	12	59	1.06	1.99	.88
大学嫌悪	21.25	6.70	0.39	10	50	0.86	1.49	.87
転出希求	3.07	1.78	0.10	2	10	1.81	2.74	.79

実施した。そして、ここで得られた因子構造の適合度を算出し、比較検討した。適合度および探索的因子分析の因子負荷量から、本稿における意欲低下領域尺度の因子構造は4因子解が妥当と考えられた。しかし、第3因子「学習意欲低下」因子および第4因子「注意散漫」因子では、特に $\alpha$ 係数が低く(それぞれ $\alpha = .61, .52$ )、これらの因子の使用にあたっては注意が必要と考えられる。第1因子「学生生活意欲低下」因子は、「item14：大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である(逆転項目)」や「item15：大学の中で自分の居場所がないと感じる」といった、大学における所属感の低さ、あるいは居場所感の乏しさが特徴と考えられる。このように感じる大学生は、授業時間以外は大学にいたることが少なく、それゆえ所属感も抱きにくく、更に大学から離れてしまう、という悪循環に陥りやすいことが予想される。

次に、学校ざらい感情測定尺度(古市, 1991)について述べる。古市(1991)では、特に因子構造について触れられていない。1因子構造が想定されていると考えられるが、1因子構造を想定するのであれば、この因子構造が妥当か否かを示す必要がある。そこで本稿では、1因子構造を想定した確認的因子分析を実施して適合度の指標を算出し、次に探索的因子分析を実施して2因子以上の因子構造である可能性を検討した。適合度の指標や、種々の因子数の指標から、本稿においては2因子解が妥当と考えられた。各因子の信頼性係数の値もおおむね良好であった。学校嫌い感情(本稿では大学嫌い感)は、学校そのものに対する漠然とした嫌悪感と、転出を希求するほどの嫌悪感、という2種類の嫌悪感が存在することが示唆された。第1因子については、大学そのものに対する漠然とした嫌悪感がなぜ生じたのか、いつもそのように感じているのか、など更なる検討を要する。第2因子については、中途退学者の心理を明らかにする上で、今後重要な位置を占めるものと考えられる。大学嫌悪が転出希求へと変容するのか、あるいは両因子は別の存在で、異なる生起プロセスが存在するのか、本稿のデータからは論じることができない。しかし、「大学が嫌」という感情の中には2種類の嫌悪感が存在することが示された本稿の結果は、大学教育や学生相談領域あるいは心理臨床に対して、示唆的である。

最後に、今後の課題について述べたい。本稿で得られた因子構造は、飽くまで国立A大学の大学生を対象としたものである。同一の偏差値の私立大学や、偏差値の異なる他大学においても同様の因子構造が得られるか否かは、今後の課題である。また、下山(1995)も述べているように、大学生の無気力を検討するためには、どのような領域で無気力であるのか、というより詳細な検討が必要である。本稿で得られた因子構造を元に大学生を類型化し、その類型の特徴を検討することで、現代大学生の特徴を詳らかにすることが望まれる。

## 引用文献

- 福田真也 (2000). 大学生の引きこもりと心身症 心身医学, 40, 199-205.
- 古市裕一 (1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 稲村 博 (1994). 不登校の研究 新曜社
- 荻間澤勇人・河村茂雄 (2001). 高校生の登校忌避的感情と学校生活適応の関係 日本教育心理学会  
総会発表論文集, 43, 245.
- 笠原 嘉 (1976). 精神科医のノート みすず書房
- 牧野幸志・森 裕紀子 (2002). 大学生活への満足度に関する教育心理学的研究——学生は大学に満足しているのか?—— 高松大学紀要, 37, 59-72.
- 文部科学省 (2008). 重要対象分野に関する評価書—若年者雇用対策— <  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/hyouka/kekka/08100103/019.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100103/019.htm)> 2016年2月4日
- 文部科学省 (2014). 学生の中途退学や休学等の状況について<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/10/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf)> 2016年1月22日
- 森田修平・岡本祐子 (2014). 青年期の自我機能と夢への態度および夢体験の関連 心理臨床学研究,  
32, 4-15.
- 中西信男・古市裕一 (1981). 自我機能に関する心理学的研究—自我機能調査票の開発— 大阪大学  
人間科学部紀要, 7, 189-220.
- R Core Team (2014). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical  
Computing, Vienna, Austria. (<http://www.R-project.org/>)
- Revelle, W. (2015). Psych: Procedures for personality and psychological research, Northwestern University,  
Evanston, Illinois, USA. (<http://CRAN.R-project.org/package=psych>)
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 総務省統計局 (2014). 人口推計 (平成 25 年 10 月 1 日現在) (<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2013np/pdf/2013np.pdf>) (2016年1月22日閲覧)
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究,  
41, 200-208.
- Walters, P. A., Jr. 1961 Student apathy. In G. B. Blame, Jr., & C. C. McArthur (Eds.), Emotional problems of  
the students. New York: Appleton Century-Crofts.  
(ウォルターズ P. A., Jr. 笠原嘉・岡本重慶 (訳) (1975). 学生のアパシー ブレイン G. B., Jr.・マッ  
カーサー C. C. (編) 石井完一郎・岨中達・藤井度 (監訳) 学生の情緒問題 文光堂 pp.106-120)
- Yves Rosseel (2012). Lavaan: An R package for structural equation modeling. *Journal of Statistical Software*,  
48, 1-36.

## 謝 辞

本研究に協力頂いた研究協力者の皆様へ、厚く御礼申し上げます。なお本研究で使用したデータ

の一部は、広島大学教育学部における授業である心理学課題演習の一環で得られました。受講生の皆様へも、感謝致します。